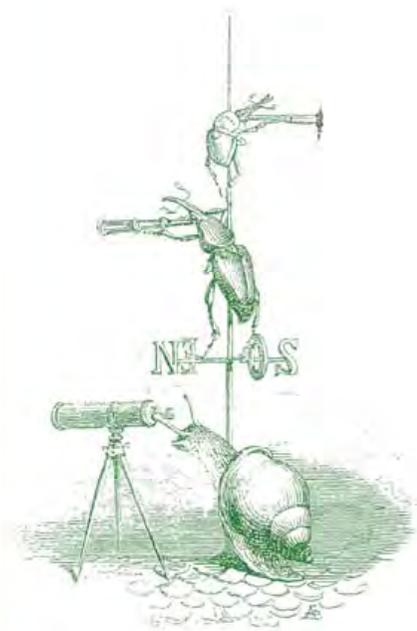


フィールド 便り



リレー連載

忘れられた当たり前を探す。目からウロコのフィールドワーク②①

地域の散髪屋になるな

過疎高齢化の先にある世界に暮らす

赤池慎吾

あかいかい しんご

高知大学地域連携推進センター特任講師
(専門は林政学)

かつては林業で栄え、魚梁瀬森林鉄道が駆け巡っていた高知県東部に位置する中芸地域。奈半利町・田野町・安

田町・北川村・馬路村を擁する同地域は、現在では全国のゆず生産量の二五%を占める「日本一のゆずの産地」

である。ゆずの収穫を迎えた秋、たわわに実った黄金色に輝くゆず畑に、人々の賑やかな声がそこかしこに響きわたる。家族総出で収穫が行われ、町外に転出している人もこの時期だけはふるさとに帰ってくる。「収穫の頃は病院に入院している患者すらいなくなる」と言われるほど、誰も彼もが収穫を手伝う。一〇月頃から出荷量が増え、一二月に最盛期を迎える頃には、ゆずを満載した軽トラックが町中で列をなし、搾汁工場から漂うゆずの香りに町全体が包み込まれる。

筆者は高知大学で地域コーディネーター(文部科学省 地(知)の拠点整備事業)として、このゆずの香り立つ地に赴任して丸三年が経った。勤務は安芸市にある「サテライトオフィス駐



図1 安田町中山地区での自然薯植え付け。

在」という形態のため、学内業務は主にTV会議システムで行う。サテライトオフィスは、より地域に近い存在である。このため筆者が何よりも嬉しいのは、地域の方たちと近い場所と同じ空気を吸い、語らうことで多くの時間を共有し、地域を肌で感じ、気持をつなげることができることだ。

サテライトオフィス駐在の地域コーディネーターの最大の強みは、地域に一番近い教員として、地域の多様な方々（住民、行政、企業、団体等）と「日常的」にコミュニケーションを図り、そして「日常的」に知識や情報を共有できる関係をつくりやすいことだろう。高知で暮らし、責務を全うするようになり、丸三年が過ぎ、まさに「地域を肌で感じる」ことが日々強くなっていく。そしてそれがまだまだおぼろ

げながらであるが、どういうことかわかっていた。地域の人たちは、地域の決めごとをメリット・デメリットの単純な構造で理解しないと言うことだ。まさに「肌感覚」、そう、身に染みてわかるという形容があてはまる。これは言葉にできない非言語的な感覚だ。必死にこの感覚を、文字や言葉で伝えようとすればするほど上滑りな感覚に陥る。

この感覚に気づくのに時間がかかったのは、これまで全国各地でフィールドワークをするなかで、筆者が地域を理解したつもりになっていたということに原因があるだろう。自分自身がつまにか当たり前と思っていること、つまり地域をメリット・デメリットの価値判断で合理的に動くものとして扱おうとしていたのかもしれないと感じ

る。地域のとある方が、「おまえな、見ず知らずの人間が女の子に『ショートカットが似合うよ』』といって髪を切ると思うか。それが散髪屋のイケメンでもためらうだろ。でもよ、その女の子が好きな男だったり親友からの言葉だったら、真剣に悩むだろう。地域と大それた一緒だよ」と宴席（おきやく）で教えてくれた。いつのまにか、自分は散髪屋（イケメン）では無いことは自覚しているが）になっていたのはと、ハッとさせられた。その言葉は筆者の体の奥深くに、抜けない棘のように突き刺さった。

地域の方の心を動かすには、筆者個人と地域の方一人ひとりがどういうつながりを持っているかということが重要だ。地域は大学に対して継続的なつながりを求めている。大学の地域貢

献が知識や技術の一次的提供にとどまる限りにおいては、例えその知識や技術が効果的であったとしても地域に根付くことなく終わってしまうのかもしれない。だからこそ、地域コーディネーターには、一つひとつの地域課題に対して、地域と顔の見える関係を築き、現地関係者との調整、学内外の研究者とのマッチング、そしてその成果を地域に還元できる形にしていくまでの継続的な仕組みづくりが求められている。筆者が担当する高知県東部だけで年間六〇件近くの地域課題や相談事が持ち込まれる。そのなかのいくつかが、地域と大学との継続的な仕組みになってきている。

三年前から大学の正課外教育を通じて、安田町中山地区で「ワンデイボランティアバスツアー」を始めた。この



図2 「森林鉄道と暮らし」のフィールドワーク。

ツアーの目的は、一年間で計四回延べ一〇〇名の学生が地域の特産である自然薯の栽培を行い、その活動を通して地域課題を学ぶ、というものである。この三年間で栽培面積は五倍に拡大し、自然薯栽培に携わる地域の方も少しずつ増えてきた。一年を通して、植え付け、草引き（除草）、収穫、販売を地域の方と一緒に活動する。年数回のそれもたった一日だけという限られた時間ではあるが、学生の来町を待ちかねる地域の方も増えてきた。さらに、二つの学生団体が立ち上がり、地域の方と学生との自然薯のようなねばりのある関係ができてきた。

さらにもうひとつ、これも三年前から人文社会科学部教員と共に「森林鉄道と暮らし」をテーマにして、地域の人々の「記憶」を「記録」するフィールドワークを進めている。地域団体の協力を得てリスト化した約六〇名は、最年長一〇二歳から最年少七一歳までいずれも中芸地域で生まれ、暮らししてきた人々だ。約二時間にわたりビデオカメラで撮影し、家族のこと、仕事のこと、趣味や思い出話など限られた時間の中でその方の「記憶」を言葉にしていただく。聞き取りをはじめからしばらくすると表情が緩み、二時間話題が尽きることは無い。

フィールドワークを進める中で感じることが、どの方も個人個人の「つながり」を良く覚えており、その「つながり」を今でも大切にされていることだ。時間をかけて暮らしの中で築いてきた人と人のつながりはとても強固で、まったく色あせることはない。地元の人々の「記憶」から見えてくる地域の姿、



図3 学生と魚梁瀬森林鉄道を散策

そこには一人ひとりの表情がはつきり
とあり、人と人とのつながりによって
地域が形作られていることを再確認で
きる。

筆者らが「映像」にこだわったのは、
地域の方の「記憶」を次の世代に直接
語る仕組みをつくりたいと考えたから
だ。地域の方が直接語る「映像」には、
文字や写真にはないインパクトがある。
さらにはデジタルアーカイブ化など活
用の汎用性もひろがる。一方、懸念す
ることもある。長い人生からみたら、
このわずか二時間の「映像」だけでは、
地域でどう生きてきたのか、記憶の背
景にある人間関係や生き方が不用意に、
いや意図しないまま切り取られてしま
う怖さも感じている。しかし、それ
も「映像」の持つ資料的価値は今日的、
いや未来への希望であろう。一〇〇年



図4 地域で開催したシンポジウム。

後の「私達」に残せるもの。一〇〇年後の「私達」がさらに紡いでいく歴史。なぜ、一〇〇年なのか。地域はこれまでも何百年も歴史を刻んでいる。確実に一〇〇年前も、二〇〇年前も、「私達」がいた。そしてその歴史は脈々と流れ、人々の中に継がれているのだ。それが「文化」なのだと思う。話を聞く中で一〇〇年という単位は地域では決して長くないと思える。筆者はそれを強く意識しながら聞き取りを進めている。加えて少しずつではあるが、ワールドワークの成果を地域に還元する取り組みも始まっている。二〇一六年三月、安田町中山地区で開催したシンポジウムには、地域内外からおよそ一四〇名の方に来場いただいた。パネル展示や研究報告は、地域の方に向けてわかりやすく伝えることを心がけた。ま

た、同年一〇月から二ヶ月間、高知市内で「高知の森林鉄道∞」展示会を開催し、多くの来場者で会場は賑わった。森林鉄道と共にあった人々の暮らしを見つめ直すキツカケになったのではないかと思う。

さらに中芸地域の歴史・文化や自然を次世代が受け継ぎ、地域外に発信する取り組みも始まっている。二〇一六年八月、「魚梁瀬森林鉄道」日本遺産推進協議会が中芸五町村連携で立ち上がった。林業からゆず産業に変化した中芸地域の人々の営みを「森林鉄道から日本一のゆずロードへ」というストーリーで紡ぎ、日本遺産認定を目指している。筆者は、ストーリー部会の部長として人文社会科学部教員らと共に協議会に参画している。

中芸地域でのこれまでの三年間を振



図5 日本遺産推進協議会での住民ワークショップ。

り返ると、ワンデイボランティアバスツアーのような大学（学生・教員）と顔の見える関係が構築されてきた上に、フィールドワークといった調査研究が実践され、その過程で大学と地域の方が地域の価値を再発見する中で日本遺産推進協議会の立ち上げのような自発的な取り組みにつながった。研究者個人の取り組みだけでは限界が有り、大学と地域の方が協働で地域課題の解決に取り組むプロセスに携わることができると、地域コーディネーターの役割であり醍醐味だと感じている。

こうした連携が進む中、二〇一六年一〇月、少し残念なニュースが飛び込んできた。平成二七年度国勢調査の速報値だ。中芸五町村の総人口は一万七七一（二〇一〇年比マイナス一〇・五五）、減少率はマイナス九・九%（最



図6 学生団体と地域づくりの打ち合わせ(著者左から2番目).

大マイナス一八・九%、最小マイナス五・三%)という数値がはじきだされてしまった。産業振興や移住対策も成果を挙げるには当分時間がかかりそうだということが、明らかになってしまった。

一〇〇年と前述したが、直近の五年、一〇年先の地域の姿はどうなっているだろうか。地域の「記憶」を受け止めて、さらに次世代に受け継いでいく人はいらぬのだろうかと不安に駆られることがある。自分は地域の散髪屋になっていないだろうか。地域の方一人ひとりとつながりを大切にし、地域と大学が共に成長し、大げさでなく一〇〇年後の私達へ繋げることが出来る地域コーディネーターであり続けたい。